Andante

No,11

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｄａｎｔｅ

【Ｎコード】
Ｎ３７４２Ｆ

【作者名】
Ｎｏ，１１

【あらすじ】
そうだ、アイツに会ったのも、こんな風に桜が綺麗な季節だった・
・

第一章　始まりの帰り道

あのとき、もうこの町にも春が来ていた。

2、3日前の寒さと、どんよりとした空の暗さがまるで嘘だったかのように、町は満開の桜と暖かな太陽のやさしさであふれかえっていた。

でも、あのときの俺はもうそんな暖かさを感じることも、やさしさを感じることもできていなかったのだろう。

あの日、そう、あの日から俺の心は終わらない悪夢にうなされつづけ、春を見つけられずにいつまでも寒い冬を過ごしていたのだろう。いや、悪夢なんかじゃなかった。

夢は朝が来れば必ず覚めるものだが、このとき俺が感じていたあの思いは終わることのない、紛れもない「現実」だったのだから。

第一幕　　春の桜

いつものようにベッドで目を覚ました俺は脇に合った時計にしせんを移した。
「もう8時か」

今日から新学期。高3になる俺は、遅刻常習犯で授業もサボりがちだったので、まわりの奴らからは完璧に「不良」のレッテルをはられていたのだが、タバコを吸ったこともないし、酒だって飲んだことはなかった（それ以前に、飲めなかった）だが、俺の通っていた高校は進学校だったと言うこともあり、授業にろくに出ず、出ても昼寝ばかりしていた俺が自動的に「不良」とみなされるのは、まぁしかたのないことだった。

その誤解を解こうとも思わないし、だいいちに、ろくに喋ったことのない連中からの評価など、どうでもよかった。

そんなことを考えながら、俺は顔を洗い制服に着替え、昨日のうちにコンビニで買っておいたパンを食べてから登校した。

「おーい神崎！何だよ珍しいなお前がまともな時間に登校するなんてよ！」

朝っぱらから馬鹿でかい声を出しながら近づいてくるこいつは牧野健也と言う。こいつは俺の中学からの友達で、こいつは俺以上の遅刻常習犯だったのだが、かず少ない俺の友達だった。

「なんだ？どちらかと言えば珍しいのはあきらかにお前の方だろ。」寝起きでイライラしながらも一応返事をしてやった。

「なになに？今日は何かあるんですかだって？よくぞ聞いてくれました！」誰も聞いていないのだが・・・

俺はこんなバカほっといて、さっさと学校へ向かおうとした。あと5分か、間に合うか？しかしあのバカはそう簡単に俺を解放してくれなかった。

「なんだよ！いま俺を完全に無視していこうとしたろ！ここまで聞いたんだぞお前は今日何があるのか知りたくないのか！？」

「ああまったくもって知りたくないなぁ。俺は今回、改めてお前のバカさ加減を知ることができたからな、それで十分だ」
それでも牧野は引き下がらなかったので、話だけでも聞いてやることにした。

「なんと！今日うちの高校に転校生が来るらしいんだけど、聞いたところによるとそいつがかなりの美人らしいんだ。」なぜか喜ぶ牧野。

「で？お前はそいつと付き合おうとでも言うのか？」冗談で言ったはずだったんだが、

「ほー、よくわかったな神崎！」こいつは冗談じゃないらしい。

「てことで、俺は先行くぜ。じゃあな遅刻すんなよ神崎君！」

それだけ言うと牧野は、そうだ、言い忘れていたが俺は徒歩で通学しているが、牧野はバイクで通学している（もちろん校則違反だが）散々人の邪魔をしておいて、最後には俺に遅刻をするなよ、という実に殺してやりたくなるような台詞を残して俺の視界からきえていった。そうこうしている間に残り時間は2分たらずになっていた。

いそいで学校へ向かっていると、さくらのきの下に、女の子がいた。髪はポニーテールできれいな栗色をしていて、身長はそれほど高くはないようだった。

「あの制服はうちの高校のだよな？」彼女は俺の通っている高校の制服を着ていた。

「見たことないやつだな。それにさっきからなにをぶつぶつ言っているんだ？」彼女は木下で目を閉じて何か小さな声でささやいていた。

「大丈夫・・・大丈夫・・・」なんとか聞き取れたのはそんな言葉だった。

「何してんだよ?はやくしねぇと遅刻するぞ!」今まで俺にきずいていなかったのか、彼女は一瞬ビクリとしてこっちをみた。

目を閉じていたのできずかなかったが、その子の目は綺麗な琥珀色をしていて、目を合わせると思わずドキッとしてしまった。

「はぁ、どうもすいません・・ついつい緊張してしまって、はい・・・」彼女は弱弱しい声でそういうと、走って学校に向かって行った。

「

不思議なやつだな」そう思いながら、俺も学校へ向かった。

俺は何とか遅刻せずに学校にたどり着いた。

「よぉ神崎ぃ~。間に合ってよかったなぁ~。」このふざけたバカはあくびをしながら俺に言う。

「なんと!転校生が来るのはこのクラスらしいんだよ。」あぁ、ま

だその話続いてたのか。そんなことを思いながら俺は言った。

「牧野。そんな話はどうだっていいんだよ。お前はおとなしく隣で寝ていろ。うっかり殺してしまいそうだ。」そんなことを言いながらも実のところ俺はあの女の子のことばかり考えていた。

「いったい、誰だったんだ?」見たことのないやつだったし名前もきいていなかったのでまったくわからなかった。

そうこうしていると先生が入ってきた。名前は岡村だ。朝の会が一通り終わると、岡村が言う。

「今日からこのクラスに転入生がくることになった。まずは自己紹介からだな。おい、さくらちゃん、入りなさい。」

バカの牧野が隣でプレゼントをもらった小学生のようにはしゃいでいた。

「はい・・・」廊下から声が聞こえ、一人の女の子が入ってきた。

「はじめまして・・えーと・・、はじめまして、春野さくらです・・あの・・よろしくお願いします!」

そう言って黒板の前に立っていたのは、さっき桜の下にいたあの女の子だった。

見たことがないと思っていたら、あいつが転校生だったのか。すると岡村が言った。

「春野、お前の席は神崎の前だ。大丈夫だぞ、柄は悪いが噛み付きはしないからな。神崎―！校内ではナンパ禁止だからな～。」

見ず知らずのやつをナンパするようなバカな高校生がいったいどこにいるのだろうか？

「やぁ、春野ちゃん。俺は牧野っていうんだ。ヨロシクね♪ん、神崎！？どうかしたのか？」隣にいた。

さくらはとても静かなやつだった。授業中はまじめに受けるし、休み時間も一人きりで外を眺めたりしているようだった。

うちの高校の女子は大抵が中のいいやつでグループをつくり昼飯を食っているのだが、さくらは一人きりで食べていた。

少し寂しそうな顔をしているのが気になったので話しかけてみよう

かと思ったが、俺は、俺の脳内会議での多数決の末、話しかけない方針をとることに決めた。

その日の放課後、俺は度重なる遅刻についてガミガミと説教を食らっていたので、帰ろうとするころ、時計はすでに7時半を指していた。

俺はカバンをとるため、夕陽のまぶしさを感じながら教室へ向かった。

部活やっている連中もとっくに帰っていたので、教室には誰もいないと思っていたのだが、そこには春野さくらの姿があった。

「おい、お前。なにやってんだ?」俺がそう聞くと春野さくらは、朝会ったときのように一瞬ビクッとしてこっちをみた。

「あ・・・神崎さんですか・・すみません、実はお財布をなくしてしまって・・その・・」

「さがしてんのか？」

「はい。そうなんです。さっきからこのあたりを探しているのですが、なかなか見つからなくて・・」と言ってまた財布をさがしはじめた。

「手伝ってやろうか？」そう俺が言うとうれしそうにニコッとして「はい」とだけ言った。朝会ったときもそうだったのだが、こいつの目は本当に綺麗だと思った。

じっと見ていると吸い込まれてしまいそうで、俺は思わずドキッとした。

結局、財布は見つからないまま俺たちは帰ることにした。

「今日は本当にありがとうございました。」帰り道、春野さくらは言う。

「あぁ、気にすんなよ。どーせ俺は部活やってねーし、一日中暇だからさ。」そう言うとさくらはまたニコリとして俺に言った。

「本当にうれしかったです。今日始めて学校にきて、それからずっと一人で、あの神崎さんって優しいんですね・・・」

「ばかいうなよ、不良だぞ？なんか企んでるかもっ、とか思わねぇのか？」俺は笑いながら言った。

「そんなことないです！神崎さんは優しいです！」ムッとしたように春野さくらが言った。

「でも本当にありがとうございました。それじゃ、また明日。」そう言うと春野さくらは帰っていった。

俺は飯を食いに牧野の下宿先にむかった。実のところ俺は一人暮らしをしている。

父親は俺が6歳の時に俺と母さんを置いてどこかへ出て行き、母さんは一人で俺を育てあげ、3年前、ちょうど俺の高校が決まった頃に病気にかかり死んだ。

それから俺は母さんの父さん、つまり祖父ちゃんが金を出してくれているアパートに一人暮らしをしている。だから俺はもっぱら牧野の下宿先で晩飯を食っている。

牧野の家族は神戸にいるらしい。牧野は野球の強豪高校でもあるうちの高校に特待生として一人で入学してきたのだ。あいつはピッチャーだったらしのだが試合中に怪

我をして野球部をやめる羽目になり、今ではだらだらとした生活を送っているわけだった。

「なに?それで、仲良く一緒にバイバイしてきたわけか?」牧野がカップ麺をすすりながら、嫌みったらしくそういった。

「ただ一緒に財布探して、たまたま帰る方向が一緒だっただけだよ!」必死に誤解をとこうとしたがこいつには無駄なようだった。

2、3時間牧野の無駄話を聞いたあと、俺は家に帰った。誰もいない家。暗い家へ。

今日は久しぶりに早く学校へ行ったせいか、ひどく眠かったので俺はすぐにベッドへ潜り込んだ。

2、3分すると睡魔が襲ってきて俺は夢の中へ落ちていった・・・・

$$\vdots$$

第一章　第二幕

寒気がする。

あれから2ヶ月、俺の心はすっかり太陽を失っていた。

アイツがいた時はひどく狭く感じたこのアパートも、いまでは恐ろしいほど広く感じられる。

どれだけ泣いたかわからない。もう涙さえ枯れてしまったのだろうと思う。

今の俺にあるのは、すっからかんになった心と、薄暗いお化け屋敷のようなこのアパートくらいだった。

第二幕　ノクターン

昨日は遅刻せずに学校に行ったせいか、今日はなかなかベッドから起き上がることができなかった。

１０時半、余裕で遅刻の時間だ。急いで学校へ向かっていると春野さくらがひとりぽつんと公園のベンチに座っていた。

春野さくらは俺にきずいたのか、こちらに駆け寄ってきた。

「遅いです神崎さん！！」は？

「遅いですって？もしかしてお前、俺を待ってたのか？」俺はためしに聞いてみた。

「はい！私のお友達は神崎さんしかいませんから・・・私、学校へ行く時は仲のよいお友達と行きたいと思っていたのです。でも神崎さん！遅かったです。今日は学校お休みするのかと思いましたよ。」昨日の弱弱しくてうじうじしたしゃべり方から一変し、明るくはきはきとそう答えた。

「さぁ、早く学校へ行きましょう！」本当に今日の春野は元気だった。

俺はあきれてものも言えず、ここまで待ってもらって嫌だ！なんて言うこともできなかったので仕方なくこいつと一緒に学校へ向かった。

何度も言うが今日の春野は異常なほど元気だった。引っ越してくる前自分が通っていた学校のこと。そこで仲のよかった友達のこと。やっとのことで学校へたどいついた俺は、春野と一緒に登校したこともあってかいつも異常にまわりに視線を向けられていた、様な気がした。

「何だ神崎？お前まさか一日であの転校生とできちゃってんか！？」いつものおちゃらけたしゃべり方ではなく、本気で、真面目な口調で牧野は言った。

「そんなわけないだろーが。てか、もしそうだったとしてもお前に何の関係があるんだ？」
すると牧野は俺の耳元で言った。
「じつわさ、俺本気で春野さくらタイプなんだよ。マジだぜマジ！なんつーかそのアレだよアレ・・・」
「一目惚れか？」
「おう、そうだそれ！でお前らホントに何にもないんだな？」今回、牧野はかなり本気のようだった。
「何にもねーよ。ホントだ、ホント。」いっそ「付き合ってるんだ！」なんて言ってみるのも面白そうだったが、それじゃあまりにも牧野がかわいそうだったので俺は一応誤解を解いておくことにた。
昼休み、俺は特に何もすることがなかったので屋上でのんびりしようと思い、屋上へ向かった。
と、その時だった俺は後ろから何者かに蹴りを食らいその場に倒れこんだ。
「よう神崎！あんた相変わらず遅刻ばっかりだって？」
そう言って俺の前に立っていたのは柊京香だった。
「で、何で俺はいきなり蹴りを食らわなきゃならなかったんだ？」
すると京香はニッコリしながら答えた。

「あたし生徒会長だからね、中学からの知り合いの遅刻を放っておくわけには行かないのよ♪」

「そんな理由で俺は蹴りを食らって、廊下で倒れこまなくちゃいけなかったのか？」

「そうよ。」こうもきっぱり言われてしまうと、こちらも反論できなくなってしまうのは困ったものである。

「はぁ・・・お前がもっと優しかったら今頃俺はお前に夢中になっていたかもしれないのにな、まったく残念だよ。」冗談で言ったつもりだったのだが、今度は顔に食らうことになった。それもグーである。

「な！なに言ってんのよ！バッ、バッカじゃないのあんたなんかどうだっていいわよ！」

そういいながらも顔を真っ赤にするところあたりはやはり可愛いと思った。

と、言うのも、事実こいつはもてもてなのだ。

髪は綺麗な黒色で、身長もクラスではまぁ高い方の部類に入る俺よりすこし低いくらいで、頭脳明晰、運動神経抜群と、何でもそろう理想の彼女像なのだ。

その凶暴性を除けばの話なのだが。

放課後、生徒会室の前で春野さくらが生徒会の数人とはなしをしていた。ひととうり話が済んだらしく、春野さくらは教室に戻っていこうとしていたので、「俺はどうしたんだ」と聞いてみた。

「あ、神崎さん！どうも今ですか？エーとですね、今度の文化祭のことについてお話をしていたんです。」

「文化祭？」

「はいそうです。文化祭です。今度の文化祭で私、ピアノの演奏をしたいんです。」

「ピアノ？」

「はい！ピアノです！」

「へーそうなのか。で、何を弾くんだ？」

「それが・・わからないんです。」！！？？一体こいつは何を言っているんだ？

「いえ、それが、弾きたい曲はあるのですが、なんという曲なのか分からないんです・・」

こいつも牧野級のバカなのか？と俺は思った。

「小さい時にお母さんがよく弾いてくれていたんです。だけど、それがなんという曲なのか分からなくて・・お母さんに聞いてもまるで覚えていないようなんです。」

だったら話は早いじゃないか、と俺は思った。

「ちょっと来いよ！」俺はそう言うとある場所に向かって走り出し

た。
弾きたい曲はある。だがその曲が何なのか分からない。だったら向かう場所はひとつだった。
音楽室。
「確か音楽の先生をやっている島村先生は大学でピアノやってたはずなんだ」
「はぁ・・そうなんですか。」
俺たちは音楽室につくとちょうど楽器の整理をしていた島村に尋ねた。
「島村！ピアノ弾いてくれないか？なんか有名なやつを片っ端から！」
「修也君？いきなりきてなんなの？」
そうだった。俺は島村に事情を話すと島村は、
「まぁいいけど、ピアノは弾かないわ。今から職員会議なのよ。そこら辺にＣＤがたくさんあるから、私が帰ってくるまで、勝手に聞いててていいわよ」と言い音楽室から出て行った。
俺たちは３０分ほどショパンだの何だのＣＤを聴きつづけた。
すると突然、春野が声を上げた。
「あ！これです！これ！」俺は早速曲名を見てみた。

「ショパンの夜想曲、第二番、変ホ長調？おまえこんなの弾くのか？」

「はい！」解説にはそう難しい曲ではないと書いてあったのだが、素人の俺が聞けばそれは紛れもなく、難しそうな曲だった。名前的に。

「お前こんなの弾けるのか？」

「無理だと思います」！！？？

「お前ピアノ弾けるのか？」

「いやー、あの、それが、一度も弾いたことないです・・・」

やはりこいつは牧野級のバカだったのだ。

俺は大きな溜息をついた。「こいつは何なんだ一体？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3742f/

Andante

2010年12月11日02時40分発行